

風を感じ、道を創り続ける



う い せい い ち
香取市長(千葉県) 宇井成一

香取市の今、此レカラ

水郷の風がそよぎ、情緒漂う香取市は、利根川が東西に流れる千葉県の北東部、東京から70km圏、成田空港から約15kmの距離にあります。北部は、利根川流域に水田が広がり、関東有数の米の産地です。南部は、北総台地の一角、緩やかな傾斜地を経て山林と畑の平坦地となり、市内のどこからでも空の広さをパノラマで体感できます。自然に恵まれ、下総唯一の宮、香取神宮のお膝元、歴史と文化薫る私たちの故郷です。

現在、香取市は、第2次総合計画の目指す将来都市像を「豊かな暮らしを育む歴史



日本一の水郷地帯



小江戸佐原の新たなランドマーク忠敬翁銅像 (JR佐原駅前) 【筆者:右から5人目】

文化・自然の郷「香取」と掲げ、「多様な働く場づくり」「安心安全な子育て環境づくり」「次世代へ続く地域づくり」そして「人を惹きつけるまちづくり」の四つの重点プロジェクトを設け、諸事業を展開しています。限られた財源と元氣あふれる人材を生かし、重点的かつ分野横断的に取り組む施策を明確にし、将来のまちを形づくること、持続可能な「香取ノ此レカラ」と考えます。

郷土の誇り

この冊子を手取る方々は、「伊能忠敬」翁をご存じと思います。佐原で商人として活躍し、のちに隠居し

た忠敬翁は、50歳を過ぎて日本全国を測量して回り、比類なき正確さと芸術性を備えた、日本初の実測地図「大日本沿海輿地全図」を作成しました。

小野川沿いの旧宅(国史跡)や向かいの伊能忠敬記念館では、実測地図など国宝に指定された資料2345点を収蔵し、入れ替えて展示しながら、日々、多くの見学者を受け入れています。平成30年の没後200年記念式典では、シーボルト氏の末裔をお迎えし、200年の時空を超えて、忠敬翁の偉業を見つめ直すことができ、新たな郷土の記録、そして、記憶に残る事業となりました。

四つの顔・四本の柱

●おいしいもの集合
「さつまいもといえば栗源」と評判も高く、自信を持って、多くの農産物を全国、世界へと流通させる農業先進地区の栗源エリア。

緑豊かな農村の「道の駅くりもと 紅小町の郷」には、おいしくて新鮮なものを求める消費者の方々が来訪され、採れたて野菜を吟味して買い求めています。それが農村と農業者の自信や誇りとなり、「農業のやる気循環型風土」の形成へとつながっています。

●そつと教えたいたい優しい台地
心が温かく、住む人が満足する山田エリ



里山と田園広がる山田エリア

●お江戸を見たりや佐原へ
 ござれ、佐原本町江戸優り
 江戸時代から明治期の建
 造物が数多く保存され、歴
 史と文化に彩られた佐原の
 町並みは、平成8年に関東
 初の「重要伝統的建造物群
 保存地区」に選定されまし
 た。また、300年超の伝
 統を受け継ぎ、平成28年、

ア。ここは私が生まれ、幼少期から地域の
 皆さんに育てていただいた場所となります。
 古民家や里山が多く見受けられ、素朴な
 感じの自然と景色が残るこのエリアは、心地
 よい不便さや物足りなさがアイテムとなり、
 人の記憶に残る、柔らかな印象を放ってい
 ます。移住・定住や自然体験と体感を可能
 にする、今も変わらぬ香取市の財産です。
 ●企業誘致・雇用促進・医療福祉
 小見川エリアは、経済活動を担う企業な
 どを積極的に誘致し、雇用が生まれ、現在、
 注目のモデルタウンとして成長しています。

また、市立病院などの医
 療福祉施設があり、日々、
 市民の安心安全な暮らしを
 支えています。豊富な水辺
 では、カヌーやボートなど
 の水上スポーツと、夏には
 歴史ある花火大会を行う多
 様な地域です。

ユネスコ無形文化遺産に登録された佐原の
 山車行事は、誇り高く、後世に受け継ぐ使
 命感を感じます。

夏と秋の2度、私も山車行事に幼い頃か
 ら参加し、今も現役、着流しに腕を通しま
 す。総檣造りの2層の山車の周囲に、関東
 彫りの緻密な彫刻がはめ込まれ、高さ4
 5mに及ぶ大人形を上部に飾り付けます。
 各町内の山車が柳をさらさらと揺らし、哀
 愁を帯びて聞こえる佐原ばやしの空気感と
 香りに包まれ巡行する様は、私たち「祭り
 びと」の全身の血を一気に巡らせます。

オートバイのつくりか

私は、政治家の父、支える母に育てられ、
 物心ついた頃から人々が集まる家で過ごし
 ました。にぎやかでしたが、なぜか常に孤
 独感を感じていて、まちづくりの志を育
 み、目標であった父の背中の大さ故、幼
 い頃には反抗し、大変扱いづらい息子で
 あったろうと自負しています。いつからか
 一人になる時間を求め、前をまっすぐ向い
 て無の境地で走るオートバイに夢中になっ
 た若き日々。今も休日は、車庫から民家の
 ない場所までバイクを押し出し、ようやく
 エンジンがかかる。この時間がたまらなく
 好きであります。

年に1〜2度は、職員のツーリングクラ
 ブに便乗し、風を感じながら共に走り、雑
 談を交わす時間を大切にしています。景色

が移りゆく中、バイクから流れ見るシー
 ンは、60歳を迎えた今でもときめき、心が躍
 ります。

それは、父の背中や面影を抱き、走り続
 けてきて、今の市長としての人生そのもの
 に通ずるものかもしれません。時に優しく
 カーブし、時に大胆に舵を切った15年。い
 ま、市民とともに少し高い丘を越え、険し
 い道走り切り、「香取ノ此レカラ」を形に
 したいと思います。

結びに、決して優等生と言えない私を
 優しく受け入れ、共にまちづくりを進める
 全ての香取市民に、心から感謝を申し上げます。



愛車と筆者